

平成30年度

卓越大学院プログラム プログラムの基本情報 [採択時公表。ただし、項目11, 12については非公表]

機関名	長崎大学	機関番号	17301
1. 全体責任者 (学長)	※ 共同申請のプログラムの場合は、全ての構成大学の学長について記入し、申請を取りまとめる大学 (連合大学院によるもの場合は基幹大学) の学長名に下線を引いてください。 (ふりがな) 氏名・職名 (こうの しげる) 河野 茂 (長崎大学長)		
2. プログラム責任者	(ふりがな) (きた きよし) 氏名・職名 北 潔 (長崎大学大学院 熱帯医学・グローバルヘルス研究科長)		
3. プログラムコーディネーター	(ふりがな) (ありよし こうや) 氏名・職名 有吉 紅也 (長崎大学 熱帯医学研究所 教授)		
4. 設定する領域	最も重視する領域【必須】	②社会において多様な価値・システムを創造するような、文理融合領域、学際領域、新領域	
	関連する領域(1)【任意】	なし	
	関連する領域(2)【任意】	なし	
	関連する領域(3)【任意】	なし	
5. 主要区分	最も関連の深い区分(大区分)	I	
	最も関連の深い区分(中区分)	58	社会医学、看護学およびその関連分野
	最も関連の深い区分(小区分)	58020	衛生学および公衆衛生学分野関連：実験系を含む
	次に関連の深い区分(大区分)【任意】	I	
	次に関連の深い区分(中区分)【任意】	54	生体情報内科学およびその関連分野
	次に関連の深い区分(小区分)【任意】	54030	感染症内科学関連
6.	プログラム名称	世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム	
	英語名称	Global Health Elite Programme for Building a Healthier World	
7.	授与する博士学位分野・名称	博士(グローバルヘルス), 博士(医学), 博士(歯学), 博士(薬学), 博士(学術), 博士(工学), 博士(環境科学), 博士(水産学), 博士(海洋科学)	
8.	学生の所属する専攻等名 <small>(主たる専攻等がある場合は下線を引いてください。)</small>	【以下、すべての研究科・専攻は長崎大学】 多文化社会学研究科多文化社会学専攻, 工学研究科総合工学専攻, 工学研究科生産システム工学専攻, 工学研究科グリーンシステム創成科学専攻, 水産・環境科学総合研究科水産学専攻, 水産・環境科学総合研究科環境科学専攻, 水産・環境科学総合研究科環境海洋資源学専攻, 水産・環境科学総合研究科海洋フィールド生命科学専攻, 医歯薬学総合研究科保健学専攻, 医歯薬学総合研究科災害・被ばく医療科学共同専攻, 医歯薬学総合研究科医療科学専攻, 医歯薬学総合研究科新興感染症病態制御学系専攻, 医歯薬学総合研究科放射線医療科学専攻, 医歯薬学総合研究科先進予防医学共同専攻, 医歯薬学総合研究科生命薬科学専攻, 熱帯医学・グローバルヘルス研究科グローバルヘルス専攻, 熱帯医学・グローバルヘルス研究科長崎大学-ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院国際連携グローバルヘルス専攻	
9.	連合大学院又は共同教育課程による申請の場合、その別 ※ 該当する場合には○を記入		
	連合大学院	共同教育課程	
10.	連携先機関名(他の大学, 民間企業等と連携した取組の場合の機関名, 研究科専攻等名)		
	ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院 (LSHTM), 北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター, 帯広畜産大学原虫病研究センター, 国立国際医療研究センター (NCGM), 国際協力機構 (JICA), シスメックス株式会社		

(機関名:長崎大学 プログラム名称:世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム)

1 3. プログラム担当者一覧

氏名	フリガナ	機関名・所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成30年度における役割)
(プログラム責任者) 北 潔	キタ ケイジ	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科長	寄生虫学・生化学 薬学博士	事業統括マネジメント、卓越大学院運営委員、講義(病原微生物学III) 研究指導(寄生虫学・生化学)
(プログラムコーディネーター) 有吉 紅也	アリヨシ コウヤ	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	臨床熱帯医学 医学博士	プログラムコーディネーター、卓越大学院運営委員、卓越合同学務委員、講義(熱帯医学基礎、病原微生物学、臨床熱帯医学)、研究指導(臨床熱帯医学)
塚元 和弘	ツカモト カズヒロ	長崎大学・教学担当理事・教務担当副学長	分子遺伝学・ 腫瘍学 博士(医学)	卓越大学院運営委員長
門司 和彦	モジ カズヒコ	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	人類生態学・ 熱帯公衆衛生学 保健学博士	卓越大学院運営委員、講義(グローバルヘルス・ヘルスプロモーション)、研究指導(人類生態学・熱帯公衆衛生学)
神谷 保彦	カミヤ ヤスヒコ	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	小児保健・ 緊急援助 博士(医学)	講義(グローバルヘルスI、小児保健、緊急援助)、研究指導(国際地域保健学、保健政策・マネジメント関連)
Sharon Cox	シャロン コックス	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	Nutrition and Infection, Maternal and child health PhD	卓越大学院運営委員、講義(疫学・統計学・栄養)、研究指導(Nutrition and Infection, Maternal and child health)
Christopher Smith	クリストファー スミス	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	Clinical Medicine & Epidemiology PhD	卓越大学院運営委員、研究指導(Clinical Medicine & Epidemiology)
菊地 太郎	キクチ タロウ	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・教授	開発援助・ 国際協力 学士(経済学)	講義(援助論)
松井 三明	マツイ ミツアキ	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・准教授	リプロダクティブヘルス・ 母子保健学 博士(医学)	講義(リプロダクティブヘルス・プログラムマネジメント)、研究指導(リプロダクティブヘルス・母子保健学)
増田 研	マスタ ケン	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・准教授	医療人類学 博士(社会人類学)	講義(医療人類学)、研究指導(医療人類学)
Chris Ng Fook Sheng	クリス ウン フック シェン	長崎大学大学院・熱帯医学・グローバルヘルス研究科・准教授	生物統計学 博士(保健学)	講義(疫学、統計学)、研究指導(生物統計学、環境疫学)
平山 謙二	ヒラヤマ ケンジ	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	免疫遺伝学 博士(医学)	講義(免疫学、バイオテクノロジー)、研究指導(免疫遺伝学)
金子 修	カネコ オサム	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	寄生虫学・マラリア分子 生物学・集団遺伝学 博士(医学)	講義(病原微生物学II(病原性原虫))、研究指導(寄生虫学・マラリア分子生物学・集団遺伝学)
金子 聡	カネコ サトシ	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	疫学・情報学 博士(医学)	講義(社会起業論)、研究指導(疫学・情報学)
橋爪 真弘	ハシヅメ マサヒロ	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	疫学 博士(医学)	卓越大学院運営委員、卓越合同学務委員、講義(疫学・統計学)、研究指導(疫学)
濱野 真二郎	ハマノ シンジロウ	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	寄生虫学・免疫学 博士(医学)	講義(病原微生物学II)、研究指導(寄生虫学・免疫学)
森田 公一	モリタ コウイチ	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	ウイルス学 医学博士	講義(病原微生物学I)、研究指導(ウイルス学)
吉田 レイミント	ヨシダ レイミント	長崎大学・熱帯医学研究所・教授	感染症学 医学博士	研究指導(感染症学)
和田 崇之	ワタ ナカユキ	長崎大学・熱帯医学研究所・准教授	細菌学・ 公衆衛生学 博士(医学)	研究指導(感染症分子疫学)
Culleton Richard Leighton	カレトン リチャード レイトン	長崎大学・熱帯医学研究所・准教授	Malariaology PhD	研究指導(Malariaology)
上村 春樹	ウエムラ ハルキ	長崎大学・熱帯医学研究所・講師	原虫学・生化学 薬学博士	研究指導(原虫学・生化学)
鈴木 基	スズキ モトイ	長崎大学・熱帯医学研究所・助教	感染症疫学・ 熱帯医学 博士(医学)	研究指導(感染症疫学・熱帯医学)
樋泉 道子	ヒスイ ミチコ	長崎大学・熱帯医学研究所・助教	小児科学・疫学・ 小児感染症学 博士(医学)	研究指導(小児科学・疫学・小児感染症学)
泉川 公一	イズミガハ コウイチ	長崎大学大学院・医歯薬学総合研究科・教授	感染制御学・ 真菌学 博士(医学)	研究指導(感染制御学・真菌学)
川上 純	カガミ アツシ	長崎大学大学院・医歯薬学総合研究科・教授	リウマチ・ 膠原病内科学 医学博士	研究指導(リウマチ・膠原病内科学)

(機関名: 長崎大学 プログラム名称: 世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム)

1 3. プログラム担当者一覧（続き）

氏名	フリガナ	機関名・所属(研究科・専攻等)・職名	現在の専門学位	役割分担 (平成30年度における役割)
西田 教行	ニシダ ノリユキ	長崎大学大学院・歯歯薬学総合研究科・教授	ウイルス学博士(医学)	卓越大学院運営委員, 卓越合同学務委員, 研究指導(ウイルス学)
由井 克之	ユイ カツユキ	長崎大学大学院・歯歯薬学総合研究科・教授	感染免疫学医学博士	卓越大学院運営委員, 卓越合同学務委員, 講義(免疫学), 研究指導(感染免疫学)
近江 美保	オミミホ	長崎大学大学院・多文化社会学研究科・教授	国際法, 国際人権法博士(法学)	研究指導(国際法, 国際人権法, フェミニズム国際法)
小松 悟	コマツ サトル	長崎大学大学院・多文化社会学研究科・准教授	開発経済学・環境経済学博士(学術)	研究指導(開発経済学・環境経済学)
COMPEL RADOMIR	コンペルラトミール	長崎大学大学院・多文化社会学研究科・准教授	比較政治学博士(国際経済法学)	研究指導(比較政治学)
見原 礼子	ミハラ レイコ	長崎大学大学院・多文化社会学研究科・准教授	教育社会学・子ども社会学博士(社会学)	研究指導(教育社会学・子ども社会学)
木村 正成	キムラ マサナリ	長崎大学大学院・工学研究科・教授	有機化学・合成化学博士(工学)	研究指導(合成化学)
清水 康博	シミス ヤスヒロ	長崎大学大学院・工学研究科・教授	センサ材料科学工学博士	研究指導(センサ材料科学)
中川 啓	ナカガワ ケイ	長崎大学大学院・水産・環境科学総合研究科・教授	水文学・水工学博士(工学)	研究指導(水文学・水工学)
太田 貴大	オオタ タカヒロ	長崎大学大学院・水産・環境科学総合研究科・准教授	生態系サービス論博士(工学)	研究指導(生態系サービス論)
濱崎 宏則	ハマサキ ヒロノリ	長崎大学大学院・水産・環境科学総合研究科・准教授	環境政策学, 環境ガバナンス論博士(政策科学)	研究指導(環境政策学, 環境ガバナンス論(水資源管理))
松本 健一	マツモト ケンイチ	長崎大学大学院・水産・環境科学総合研究科・准教授	環境経済学・環境政策・応用経済学博士(総合政策)	研究指導(環境経済学・環境政策・応用経済学)
重富 陽介	シゲトミ ヨウスケ	長崎大学大学院・水産・環境科学総合研究科・助教	環境システム学, 産業エコロジー学博士(エネルギー科学)	研究指導(環境システム学, 産業エコロジー学)
山本 裕基	ヤマモト ユウキ	長崎大学大学院・水産・環境科学総合研究科・助教	環境経済学・開発経済学博士(経済学)	研究指導(環境経済学・開発経済学)
Peter Piot	ピーターピョット	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・学長	熱帯医学・ウイルス学医学博士	アドバイザー
Anne Mills	アンミルズ	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・公衆衛生・政策研究科・教授・副学長	Public Health, Health economics PhD	アドバイザー
Audrey Prost	オートレイブprost	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・公衆衛生・政策研究科・教授・教学担当理事	Social epidemiology PhD	卓越合同学務委員
Brian Greenwood	ブライアングリーンウッド	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科・教授	熱帯医学医学博士	アドバイザー
Beate Kampmann	ビエテカムプマン	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・MRCガンビア研究拠点・教授・ワクチン免疫部門長	Vaccinology, Immunology, Pediatrics PhD	研究指導(Vaccinology, Immunology, Pediatrics)
John Edmunds	ジョンエドモンズ	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・疫学集団健康研究科・教授	Mathematical Modeling, Epidemiology PhD	卓越合同学務委員, 研究指導(Mathematical Modeling, Epidemiology)
John Morrison Kelly	ジョンモリソンケリー	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科・教授	Parasitology, Molecular Biology, drug development PhD	研究指導(Parasitology, Molecular Biology, drug development)
Kim Mullholand	キムムルホルランド	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・疫学集団健康研究科・教授	Vaccinology, Tropical Child Health PhD	研究指導(Vaccinology, Tropical Child Health)
Ian Roberts	イアンロバート	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・疫学集団健康研究科・教授・臨床治験センター長	Clinical Trial PhD	研究指導(Clinical Trial)
Richard Coker	リチャードコーカー	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・公衆衛生・政策研究科・教授	Public Health PhD	研究指導(Public Health)
Christopher John Drakeley	クリストファージョンドラッケレイ	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科・教授	Immunology, Malariaology PhD	研究指導(Immunology, Malariaology)
Martin L. HIBBERD	マーチンエルヒバート	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科・教授	Emerging Infectious Diseases, Genome Research PhD	研究指導(Emerging Infectious Diseases, Genome Research)
Umberto D'Alessandro	ウムベルトアレクサンドロ	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科・教授・MRCガンビア研究拠点長	Malariaology, Epidemiology PhD	研究指導(Malariaology, Epidemiology)
David Mabey	デービッドメイビー	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科・教授	Tropical Infectious Diseases PhD	卓越合同学務委員, 研究指導(Tropical Infectious Diseases)
Robin Bailey	ロビンベイリー	ロンドン大学衛生熱帯医学大学院・熱帯感染症研究科教授・臨床熱帯医学修士専攻長	Tropical Medicine, Infectious Diseases PhD	研究指導(Tropical Medicine, Infectious Diseases)

(機関名:長崎大学 フォログラム名称:世界を動かすグローバルヘルス人材育成プログラム)

平成30年度
 卓越大学院プログラム 計画調書

[採択時公表]

(1) プログラムの全体像【1 ページ以内】

(申請するプログラムの全体像を1 ページ以内で記入してください。)

グローバル化が進行する中、新興・再興感染症をはじめとする疾病・健康不安が、途上国・先進国等を問わず地球規模課題となり、国際社会が協調して課題解決に取り組む「グローバルヘルス」の推進は、我が国に真の安全と安心、経済発展をもたらすとともに、国際社会における我が国のプレゼンスを高めることにもつながる。グローバルヘルスを推進できる卓越したリーダー育成のニーズは国内外を問わず高まっている。

本申請プログラムは、グローバルヘルス領域でロールモデルとなる多くのトップレベル教員を擁し世界最高峰に位置する英国ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院 (LSHTM) との緊密かつ有機的なパートナーシップの下、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス (TMGH) 研究科を中核母体とした先進的な学位プログラムを構築し、“世界を動かし地球規模の健康課題を解決できる真に卓越したグローバルヘルス人材”を少数精鋭で育成するものである。具体的な卓越人材像は、地球規模で生じている健康課題を現場レベルで深く理解し、その解決に向けて技術や理論を構築できる教育・研究能力を有するとともに、学術的知見をグローバルな政策立案・実行等に結び付ける能力を兼ね備えた実践的・社会的リーダーである。

以下に、本プログラムの特色、卓越性に関する重要なポイントを列記する。

- (1) 最大の特色、卓越性は、博士後期課程における LSHTM との Joint PhD Degree Programme である。長崎大学と LSHTM の教員に国内外のトップ研究者が加わったチーム型研究指導體制により、卓越した学生が創造的研究を主体的に遂行できる環境を提供する。入口における Upgrade Examination, 中間段階での Qualifying Examination, 出口における博士論文審査, 修了判定を長崎大学と LSHTM の卓越合同学務委員会が厳格に管理することで、質の卓越性を保証する。
- (2) 博士前期課程の2年間は、Joint PhD Degree Programme を完遂するための研究力の基盤を養成する期間として位置づけ、強化されたコースワークと修士論文で優秀な成績を修め、Upgrade Examination に合格することを進学の要件として課す。
- (3) 長崎大学には、熱帯医学に関する国内唯一の「熱帯医学研究所」を核として、大学全体で感染症研究を推進してきた 75年の蓄積に基づく卓越した教育・研究基盤が存在し、それが LSHTM との強固な絆の原動力となっている。その過程で構築したケニア、ベトナム等の海外研究拠点は、LSHTM が持つガンビア、ウガンダ研究拠点とともに、学生に多国籍フィールド研究の場を提供する卓越した研究インフラである。同様に、2020年に長崎大学内に竣工予定のBSL-4施設（高度安全実験施設）も、グローバルヘルスの重要課題であるエボラウイルスなどBSL-4病原体を取り扱える国内唯一の卓越した教育・研究基盤となる。
- (4) 人材育成面でも、特色ある教育基盤が蓄積している。全国唯一の感染症に特化した博士課程「新興感染症病態制御学系専攻」（2000年開設）が、2012年度博士課程教育リーディングプログラムの創設につながった。さらにグローバルヘルスの現場で高い実務力を発揮できる専門家を育成するため、2006年と2008年に医師を対象とした「熱帯医学修士課程」と本邦初の国際保健に特化したMPH（公衆衛生学修士）を授与する「国際健康開発研究科」の二つの修士課程を設置し、2016年の統合改組によりTMGH研究科の創設につながった。TMGH研究科では、既にLSHTMとの協働による教育プログラムが実質的にスタートしJoint PhD Degree Programmeの準備が整うとともに、昨年4月からは東京の国立国際医療研究センター内にサテライト・キャンパスを開設し、首都圏の社会人にも門戸を開放した。
- (5) 学長の下に新たに「大学院改革推進会議」を創設し、予算や人員等の学内資源の重点支援を可能にした。本会議は、プログラムの継続性を担保するとともに、教育・研究機関や学内の研究科の枠組みを越えて社会のニーズに正しくかつ迅速に対応できる新しい学位プログラムの機動的な構築を可能にする大学全体の大学院システム改革を断行する。

ポンチ絵は不要です。

(2) プログラムの内容【4ページ以内】

(国内外の優秀な学生を、高度な「知のプロフェッショナル」、すなわち、俯瞰力及び独創力並びに高度な専門性を備え、大学や研究機関、民間企業、公的機関等のそれぞれのセクターを牽引する卓越した博士人材へと育成するため、国際的に通用する博士課程前期・後期一貫した質の保証された学位プログラムを構築・展開するカリキュラム及び修了要件等の取組内容を記入してください。また、人材育成上の課題を明確にした上で、その課題解決に向け検証可能かつ明確な目標を、プログラムの目的にふさわしい水準で設定し、さらに、目標の達成のために申請大学全体の大学院システムをどのように変革するかを明確に記入してください。)

1) プログラム概要

本申請プログラムは、グローバルヘルス領域で世界最高峰に位置する**英国ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院 (LSHTM) と国際連携グローバルヘルス専攻 (Joint PhD Degree Programme : 以下「Joint PhD」という)**を立ち上げた長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス (TMGH) 研究科を中核母体とした学位プログラムを構築し、グローバルヘルス領域における卓越した**少数精鋭(定員8名)の研究・教育**を実施する。**全ての教育を英語で実施**し、コースワーク(座学)中心の博士前期課程、リサーチワーク(研究)中心の博士後期課程5年一貫のカリキュラムに**LSHTMの講師陣及び教育資材を同化・浸透させる**とともに、問題解決のために官民間問わずあらゆるセクターの多様な専門領域における傑出した専門家・実務者からハイレベルな指導を受けられる斬新な教育・研究環境を提供する。その概略は:

①定員8名は、TMGH研究科入学生を原則とするが医歯薬学総合研究科、工学研究科、水産・環境科学総合研究科及び多文化社会学研究科の博士前期課程及び修士課程の学生にも門戸を開放し、長崎大学教員とLSHTM教員とで構成する卓越合同学務委員会が選考を実施する。

②博士前期課程では、すでにLSHTMの教員と教材を基盤として構築したTMGH研究科博士前期課程の各モジュールを本プログラムによりさらに強化・充実させた「グローバルヘルス卓越コースワーク」を受講し、Joint PhDを完遂できるレベルの高度な知識と技術を学ぶ。前期課程終了時にJoint PhDへの進学を審査する試験(Upgrade Examination)を卓越合同学務委員会が実施する。

ただし、**学生間の競争原理**を導入するため、選抜された8名のみならず本プログラム以外の少数の博士前期課程学生で、Joint PhDを希望する者も「Joint PhD候補生」として登録することができる。Joint PhD候補生は、「グローバルヘルス卓越コースワーク」を受講することを条件に、本プログラムに入学した学生8名と同様にJoint PhDへの進学試験(Upgrade Examination)に挑戦することを可能とする。8名の本プログラム博士前期課程学生においても、Upgrade Examinationにおいて上位に入らなかった場合は、本プログラムから外れ、卓越大学院プログラム以外のTMGH研究科博士後期課程専攻へ移籍することとなる。

③Joint PhDに進学した学生はTMGH博士後期課程に所属し、LSHTMの世界トップレベル教員から直接指導を受ける「グローバルヘルス卓越リサーチワークモジュール」を受講する。進学後1年次終了時に、研究・教育の質を保証するため同委員会によるQualifying Examinationを受け、**国際的な多分野の指導教官から構成される研究チームにより卓越した研究指導(チーム型研究指導)**を受け、博士論文を作成し、卓越した審査委員による質の高い学位審査を受けることとなる。例外として、TMGH以外の研究科博士後期課程に在籍したままnon-Joint PhD学生として本プログラムの卓越した研究指導を受けることを可能とする。

2) 博士前期・後期一貫の考え方および修了要件

本プログラムの最大の特長は、博士後期課程にあたるLSHTMとのJoint PhDであり、博士前期課程の2年間は、Joint PhDを完遂できるレベルの実力を付与するための基盤を養成する期間として位置づけられる。そのなかから、コースワークと修士論文で優秀な成績を修め、かつ長崎大学とLSHTMとの教員で構成する卓越合同学務委員会によって課されたUpgrade Examinationに合格し、国際的競争に打ち勝ってJoint PhDを完遂できるレベルと判断された学生を厳選し、卓越大学院プログラムの博士後期課程へ進学させる。

コースワーク(座学)は、2年目までの博士前期課程にほぼ終了させ、本プログラムによってさらに充実させたLSHTMの教育資材を織り交ぜたTMGH研究科の教育モジュールを受講させることで、グローバル領域での研究を開始するための知識と技術を初期段階で修得させる。さらに、博士前期課程で実施される修士研究プロジェクト(多くはアジア・アフリカの海外研究フィールドでの国際共同研究を想定)を通じて、知識や技術を定着させるとともに、学生の国際的コミュニケーション能力や現場で研究を遂行させる実践力が養われる。

博士後期にあたる3年目以降は、学生が国境や専門領域、官民等のセクターを越えて研究活動に従事できる環境を提供するため、リサーチワーク(研究)中心とし、特別な場合を除いて、コースワークは課さない。さらに、本プログラムの博士研究に着手するためには、博士後期課程1年次終了時にLSHTM

と本学の卓越合同学務委員会が課す Qualifying Examination に合格する必要がある。学生は、本プログラムの学位を授与するに値する教育を 5 年以上受け、必要な単位数 50 単位以上を修得して博士論文を作成し、審査及び最終試験に合格することによって修了することができる。

3) カリキュラム・取り組み内容

博士前期にあたる 2 年目までのコースワークは、既に LSHTM のカリキュラムと教材を核に構築した TMGH 研究科博士前期課程のモジュールをベースに、各モジュールに卓越大学院のレベルに則した以下のアドバンスト科目を設定し、「グローバルヘルス卓越コースワーク」としてカリキュラムを構築する。

①熱帯医学モジュール

国内唯一の熱帯医学分野における大学附置研究所である熱帯医学研究所の教員を核として、75 年にのぼる本学の感染症研究及び医歯薬学総合研究科熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラムの教育・研究実績をベースに、熱帯医学・感染症にかかるモジュールを構築する。LSHTM より派遣され TMGH 研究科に常駐する英国人臨床教授 1 名および短期で講義に訪れる LSHTM 教員 4～5 名が TMGH 研究科教員（科目責任者）とともに教育を行う。また、新たに設置予定の感染症共同研究拠点（BSL-4）を通じて、北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター、帯広畜産大学原虫病研究センター、東京大学医科学研究所、大阪大学微生物病研究所など全国の学術機関との教育・研究ネットワークを軸に卓越した講義を展開する。さらに、エボラなど新興感染症の検査診断ツールを開発する東芝、栄研化学、マラリア対策に向けた新たな技術を開発する住友化学やシスメックス、日本が開発した認証技術をアジア・アフリカの健康増進へ応用する NEC、熱帯感染症に対する創薬を研究する塩野義製薬など、グローバルヘルスへ貢献をめざす民間企業の研究者によるセミナー形式のグローバル感染症セミナーを卓越大学院アドバンスト科目として開講し、産業界等との連携方法等について修得する。

②疫学・統計学モジュール

世界トップレベルの疫学・統計学の講義を展開する LSHTM から、講師陣及び教育資材を本プログラムに完全移植し、長崎の地で世界トップレベルの講義の受講を可能とする。卓越大学院アドバンスト科目として開講する感染症疫学、データ解析演習は、世界各地で発生しうる新興再興感染症に対する有効な予防・介入策をエビデンスに基づいて提言・実施するためのエッセンスを教授するもので、既に LSHTM とのクロスアポイントメントにより TMGH 研究科に常駐する英国人疫学教授 1 名・統計学准教授 1 名やその他招聘講師と TMGH 研究科教員による国際的に極めて評価が高い LSHTM 方式の講義を展開する。

③地球環境・衛生学モジュール

気候変動や越境大気汚染など地球規模の環境保健課題と、自然環境の変動によりその分布が変化する衛生動物の問題を俯瞰し解決するための方法論を修得する。水産・環境科学研究科教員と TMGH 研究科教員が共同でモジュール責任者となり、卓越大学院アドバンスト科目として開講する国際環境保健学、環境疫学は、LSHTM から招聘する世界的な権威によるレクチャーを核に構成する。

④保健政策・マネジメントモジュール

我が国に専門家が少ない医療経済および保健政策に関する科目を強化するため、LSHTM から招聘する当該分野の教授によるレクチャーを核にモジュールを構成する。また、厚生労働省、外務省担当者及びその管轄に所属する、国立国際医療研究センター（NCGM）及び国際協力機構（JICA）から実務家教員を招聘しポリシーメイキングに関する特別セミナーを実施する。本モジュールを履修することにより学術的知見を政策等に結びつけることが可能な能力を修得する。

⑤国際地域保健学モジュール

母子・小児保健、地域保健などグローバル化社会における地域住民の健康課題とニーズを学習するとともに、疫学研究等で明らかとなったエビデンスに基づく診療やケア、施策等をいかに地域や組織で実践可能な形で普及、維持、発展させていくかを研究する新しい学問 Implementation Science（実装科学）をアドバンスト科目として設定し LSHTM より当該分野を開拓・先導する専門家を招聘する。

⑥社会行動科学モジュール

健康問題の社会的側面に関する知識と見方を習得することを目的とし、グローバルヘルスに関連する社会要因や健康増進を展開する方法を学習する。定量的調査法と質的調査法に加えて、両者を統合し研究の妥当性・信頼性を高める目的で開発された混合研究法（mixed methods）について学ぶ科目を、LSHTM より教授を招聘しアドバンスト科目として開講する。

次に、博士後期にあたる 3 年目以降については、「グローバルヘルス卓越リサーチワークモジュール」

を開講し、TMGH 研究科、熱帯医学研究所の教員を中心とした本学教員及び前述した LSHTM 教員など国内外の教育・研究機関に所属する研究者により構成される複数（3 名以上）の指導教員からなる研究指導チームの研究指導「チーム型研究指導」を受ける。この研究指導チームの研究指導方針は、本プログラムの人材養成像にある、世界を動かし地球規模の健康課題を解決できる人材の育成に繋がるよう、課題解決型の研究指導を実施することとする。そのため、研究指導チームに様々な所属・分野のロールモデルとなる卓越した指導教員を参画させ、グローバルヘルスという学際性が高く、ともすれば拡散しがちな多様な諸関連分野を、グローバルヘルスをキーワードに実利的な目的を明確に設定し、研究指導を実施する。この「チーム型研究指導」の最大の狙いは、従来の「リサーチワーク」にありがちな縦型の専門化・思考の硬直化を排除し、研究レベルでの思考の深さ、創造性、柔軟性を養成することにある。様々な分野の教員から指導を受けることで、高い学術的知見をグローバルな保健医療関連の諸活動、国際機関や国家、地域における政策立案と実践に結びつけ、“世界を動かし地球規模の健康課題を解決できる真に卓越したグローバルヘルス人材”の育成が可能となる。また、学生は自身の研究テーマに沿って、LSHTM と本プログラム教員が合同で実施する優れた国際共同研究に参画する中で世界最高水準の研究指導を受けることが可能となり、博士レベルにおいて教育・研究・実践を一体化させた教育を展開し、卓越したグローバルヘルス人材へ育て上げる。

4) 国際通用性の確保・質の保証

卓越した学位の質は、論文審査員の卓越性によって決定付けられる。よって本プログラムでは、学位の質を保証するために、長崎大学と LSHTM の卓越合同学務委員会によって、専門領域の適合性、業績、教育実績、倫理性、人間性を厳格に評価し論文審査員を選考する。論文審査員には、本学教員と LSHTM の著名な研究者に加え国内外から当該分野を先導する現役の外部審査員を配置して、論文審査及び最終試験を実施する。学位については、所属する研究科から授与される学位記に卓越大学院プログラムを修了して取得した学位である旨を明記する。

2 年目の Upgrade Examination, 3 年目の Qualifying Examination では、これらの試験に合格した者のみが本プログラムの博士研究を遂行することが可能となる厳格な要件を課し教育の質を保証する。入学した 8 名のうち上記の試験に合格できなかった者は、「グローバルヘルスプログラム運営委員会」の判断により、プログラムから外れ元々籍を置く研究科の通常の大学院課程に戻る事となる。

前述の卓越合同学務委員会は、リサーチワーク主導型の教育課程を、チームによる共同指導体制で実施することから、個々の学生における指導体制の管理及び研究の進捗管理が重要となるため、この管理を実施するシステムとして、長崎大学及び LSHTM の教員により構成し教育・研究の質を担保する。本委員会は、2 年目の Upgrade Examination, 3 年目の Qualifying Examination, 博士論文審査、修了判定と、入学から学位取得までのプロセスを管理し、教育・研究・学位の質を担保する機能を果たす。

また、本プログラムで養成する真に卓越した「知のプロフェッショナル」を兼ね備えた人材は、決められたカリキュラムを優秀な成績で修了することのみで真に卓越した人材になるわけではないと考える。基礎知識を修得し、専門性の高い指導を受け、それらを応用して地球規模の健康課題の克服に向けてこれまでにないアプローチを創造し、型破りで革新的な研究に挑戦することが必要となる。そのため本プログラムにおいては、学生に対する卓越した英才教育のみならず、指導する教員側の意識改革を実施する。そのために、これまで指導教員が研究テーマを与え、研究に必要な研究費を獲得するという指導上の依存体質を無くし、学生が自ら研究計画を策定し、チームによる研究指導及び Qualifying Examination がその研究計画の質を保証すると共に、学生に一定の研究費を与えて研究を遂行させた上で厳格な論文審査を受け学位を取得するというサイクルを構築し、質を保証しつつ学生が自律的に解決方法を求め、自由に研究を遂行できる環境を整える。

さらに、卓越した学位の質を維持するためには、きわめて優秀かつポテンシャルの高い学生を入学時点で選抜することが必須である。学生の選抜は、TMGH 研究科入学選抜試験において 80%以上の得点を獲得した者（TMGH 研究科の合格ラインの目安は 60%）のうち、本プログラムを希望する者に対して、国際性、卓越性を強く意識したアドミッション・ポリシーに沿って、卓越合同学務委員会による英語での面接と研究計画書の書類審査を実施し選抜する。さらに面接では、倫理・人間性の側面からグローバルリーダーとしての資質について重視し、より良いグローバル社会を創出したいという確固たる情熱をもった人材を選考する。

また、本卓越プログラムの枠外で、世界各国の LSHTM, リバプール, ジョンスホプキンス, ハーバード大学などの世界トップレベルのグローバルヘルス関連修士課程修了者も Joint PhD に入学することが予想され、多様性ある卓越人材間の切磋琢磨と協働の環境の中で国際通用性のあるグローバルヘルス人材が育つことになる。

5) 人材育成上の課題と課題解決に向けた方策

① チーム型研究指導

グローバルヘルスという学際的領域において、真に卓越した人材を育成するためには、多様性を持った体系的「コースワーク」型の前期課程カリキュラムをベースにした上で、「リサーチワーク型」の後期課程カリキュラムにおいて、国際的な多分野の指導教官から構成される「チーム型研究指導」を採用することが極めて重要である。前述の通り、この「チーム型研究指導」の最大の狙いは、従来の日本型の指導教官との一対一の関係に縛られた狭い領域で硬直化した思考から脱し、研究レベルでの思考の深さ、創造性、柔軟性を養成することにある。この方法は連携する LSHTM 方式で、多くの英国大学が採用して成功していることから、成果として高い国際的評価を受けるシステムと判断される。具体的には、主指導教員とは別の分野を専門とする教員や海外で現地指導できる教員を副指導教員として 2 名以上配置し、計 3 名以上の教員による共同指導体制を構築する。また、主指導教員が LSHTM の教員の場合、副指導教員のうち 1 名は本学の教員が担当することとし、研究指導チームもジョイントされた構成によるものとなる。さらに、必要に応じて外部の専門家によるアドバイザリーボードを設置する。

② Joint PhD Degree Programme 以外の学生指導について

博士後期課程で Joint PhD を履修する場合、学生は設置規定上 TMGH 研究科の所属となるが、本学は「グローバルヘルス」をキーワードに大学院教育改革を実施する観点から、TMGH 研究科 Joint PhD 以外の医歯薬学総合研究科、工学研究科、水産・環境科学研究科及び多文化社会学研究科に学生が所属したまま本プログラムを履修することも可能とする。その場合も Joint PhD と全く同様、長崎大学教員に加え LSHTM 教員又は本プログラムに参加する他大学や研究機関及び関連企業研究員からなるチーム型研究指導体制をとり、さらに卓越合同学務委員会による 2 年目終了時の Upgrade Examination, 3 年目の Qualifying Examination, 博士論文審査, 修了判定を課し、世界トップレベルの研究を可能とする環境を整備・保障することで、本プログラムの人材養成像へ育て上げる。

③ プログラム評価指標

プログラムの国際的な通用性・卓越性・優位性を担保するため、プログラムの各プロセスで生じる活動を測るための指標であるプロセス評価指標と、プログラムの活動の結果を測るための指標であるアウトプット評価指標を区別して設定する。主なプロセス評価指標として、1) LSHTM とのクロスアポイントメント・派遣教員数、2) 博士前期課程招聘海外講師講義時間数、3) 博士前期課程招聘企業講師講義時間数、4) 学生および教員の国際共同研究参加数、5) チーム型研究指導参加学外教員数、6) LSHTM の客員教授等称号を付与された長崎大学教員数を設定する。また、主なアウトプット評価指標として、1) 学生による国際学会発表数、2) 学生による国際学術誌掲載論文数、3) 学生による外部奨学金獲得数、4) 学生による競争的研究費獲得数を設定する。この両指標を区別しながら組み合わせることで定量的管理を行うことにより、より精度の高いプログラムマネジメントを可能とする。(数値目標は次ページに記載)

6) 目標達成のための大学全体の大学院システム改革の方針

本卓越大学院プログラムは、本学の世界的教育・研究拠点の人材育成面における中心戦略に位置付けられ、学内の既存研究科横断的な教員組織を構築する点、当該領域において世界のトップに位置する LSHTM との Joint PhD 制度を採用する点で、きわめて先進性の高い取組みである。

この目標を達成し高度な「知のプロフェッショナル」を育成するために、学長の下に新たに「大学院改革推進会議」を創設し、そのリーダーシップにより、社会のニーズに適切かつ戦略的に対応できる新しい学位プログラムの機動的な構築を可能にする大学全体の大学院システム改革を断行する。改革の主要なポイントは、(1)従来の 7 研究科に閉じた縦割りの教員組織に横ぐしを入れ生命科学、理工学、人文社会科学の 3 学域に大括り化すること、(2)自前主義を排し大学の枠組みを超えた他教育・研究機関との有機的な協働による学位プログラム (Joint PhD を含む) の構築を可能にすること、及び(3)予算や人員等の学内資源の本プログラムへの重点配分を可能にし、将来にわたる継続性を担保することである。この大学院システム改革は、本プログラムの目標達成にとどまらず、他領域における高度な知のプロフェッショナル育成のための学位プログラム創設にも波及することで、本学全体の将来構想実現に向けた強力なドライビング・フォースとなる。

※プログラムの内容が分かるようにまとめたポンチ絵(1ページ以内)を別途添付してください。(文字数や行数を考慮する必要はありません。)

(2)プログラムの内容 - 長崎大学 -

世界を動かした地球規模の健康課題を解決できる 真に卓越したグローバルヘルス人材を輩出



修了要件

本プログラムの学位を授与するに値する教育を5年以上受け、必要な単位数50単位以上を修得して博士論文を作成し、論文審査及び最終試験に合格

グローバル卓越リサーチワークモジュール

チーム型研究指導

実利的な目的を明確に設定し、課題解決型の研究指導を行う

LSHTMと本プログラム教員が合同で実施する世界を動かす国際共同研究に参画する中で卓越した研究指導を受ける

地球規模で生じている健康課題を現場レベルで深く理解し、その解決に向けて技術や理論を構築できる教育・研究能力を有するとともに、学術的知見をグローバルな政策立案・実践等に結び付けられる能力を兼ね備えた実践的・社会的リーダーを養成

ロールモデルとなるべき世界トップレベルの教員・研究者により構成された複数(3名以上)の指導教員からなる研究指導チーム

本学とLSHTMが構築した他に類を見ないアフリカ・東南アジア教育研究ネットワークを中心に、国境や専門領域、官民等のセクターを超えて研究活動を行える環境を提供

グローバル卓越コースワーク

熱帯医学

疫学・統計学

地球環境・衛生学

保健政策・マネジメント

国際地域保健学

社会行動科学

1・2年目

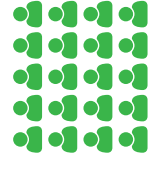
卓越大学院のレベルに即した課題解決型のアドバンスド科目を設定し、博士後期課程(Joint PhD)を完遂できる実力を養成

・アドバンスド科目例
熱帯医学…「グローバル感染症セミナー」
グローバルヘルスへ貢献を目指す民間企業の研究者によるセミナー形式
疫学・統計学…「感染症疫学」・「データ解析演習」
新興再興感染症に対する有効な予防・介入策をエビデンスに基づいて提言・実施するためのエッセンスを教授

卓越大学院正規生
(定員 8名)



Joint PhD
候補生(※1)



LSHTMとの
Joint PhD
(※2)



論文審査及び最終試験

論文審査委員
本学教員
LSHTMの著名な研究者
国内外から当該分野を
先導する現役の外部審査員

**3年目終了時
Qualifying Examination
実施**

**2年目終了時
Upgrade Examination
実施**

**1年目終了時
コースワーク成績判定
によるフォローアップ**

選抜試験
○TMGH研究科入学選抜試験において80%以上の得点を獲得
○英語による面接
○書類審査(研究計画書等)

卓越合同学務委員会 (教育・研究・学位の質を担保する機能を果たす)

本プログラム参加を希望する学生

※1 熱帯医学・グローバルヘルス研究科、工学研究科、多文化社会学研究科の博士前期課程及び医歯薬学総合研究科の博士課程(4年課程)1年次の学生より選抜
※2 本プログラム博士後期課程はロンドン大学衛生・熱帯医学大学院とのJoint PhDを取得するコース及び学生が所属する研究科において学位を取得するコースに分かれる

◎プログラムとして設定する検証可能かつ明確な目標【1ページ以内】

項目	内容	備考
【プロセス評価指標】		
LSHTM とのクロスアポイントメント・派遣教員数	平成 30～31 年度 5 名 平成 32～33 年度 8 名／年 平成 34～36 年度 10 名／年	LSHTM から長崎大へ長期派遣される教員数。大学間連携を象徴する指標。
博士前期課程招聘海外講師講義時間割合	平成 30～31 年度 10% 平成 32～33 年度 20% 平成 34～36 年度 30%	グローバルヘルス分野の一流の教員による講義数を示す指標
博士前期課程招聘企業講師講義時間割合	平成 30～31 年度 3% 平成 32～33 年度 5% 平成 34～36 年度 10%	産業界等との連携を示す指標。
学生および教員の国際共同研究参加件数	平成 30～31 年度 50 件 平成 32～33 年度 60 件／年 平成 34～36 年度 70～100 件／年	研究の国際度を示す指標。
チーム型研究指導参加学外教員数	平成 30～31 年度 一名 平成 32 年度 20 名 平成 33 年度 35 名 平成 34～36 年度 50 名／年	博士後期課程学生 1 人につき 2 人以上を想定。
LSHTM の客員教授等称号を付与された長崎大学教員数	平成 30～31 年度 2 名 平成 32～33 年度 3 名 平成 34～36 年度 5 名	LSHTM との大学間連携を象徴すると同時に共同研究を通じた研究者の交流を表す指標。
【アウトプット評価指標】		
学生による国際学会発表数	平成 30～31 年度 4 件 平成 32～33 年度 20 件 平成 34～36 年度 20 件／年	特に優秀な学生は M2 から成果を発表することを想定。
学生による国際学術誌論文掲載数	平成 30～31 年度 一本 平成 32 年度 4 本 平成 33 年度 8 本 平成 34～36 年度 16 本／年	特に優秀な学生は修士論文を D1 でパブリッシュすることを想定。
学生による外部奨学金獲得数	平成 30～31 年度 2 名／年 平成 32～33 年度 5 名／年 平成 34～36 年度 5 名／年	M1 入学時および D1 進学時を想定。
学生による競争的研究費獲得数	平成 30～31 年度 2 名 平成 32～33 年度 5 名／年 平成 34～36 年度 5 名／年	特に優秀な学生は M2 で研究費獲得を想定。

※適宜行を追加・削除してください。

(3) プログラムの特色、卓越性、優位性【2ページ以内】

(「最も重視する領域」を中心に、申請するプログラムが国際的な観点から見て有している特色、卓越性、優位性に関して記入してください。)

本プログラムは、公募領域②「社会において多様な価値・システムを創造するような、文理融合領域、学際領域、新領域」で申請する。本プログラムは以下に示すとおり国際的な観点から見た特色、卓説性、優位性を持っている。

ロンドン大学衛生・熱帯医学大学院との戦略的パートナーシップ (Joint PhD Degree Programme)

本プログラムの最大の特色、卓越性は、**グローバルヘルスでは世界最高峰に位置するロンドン大学衛生・熱帯医学大学院 (LSHTM) に並行して学籍を持ち、両校が認める学位を取得する Joint PhD を軸として、世界最高レベルの PhD を創出する点**にある。卓越した人材を育成するうえで、最も有効な手段は、個々の学生が、そのロールモデルとなるべき世界トップレベルの教員・研究者たちと共に、卓越した国際共同研究・教育・対策プロジェクト等に実際に参画することである。グローバルヘルス領域で、第1回、第2回の野口英世アフリカ賞受賞者である Brian Greenwood 教授及び Peter Piot 学長を筆頭に多くのロールモデルが集結し世界最高位に位置する LSHTM と長崎大学の戦略的パートナーシップを構築し、そこへ卓越した長崎大学の蓄積・経験を含む日本独自のポテンシャルを統合させ、世界に貢献できる人材を輩出していくことが、本プログラムの核心である。

また、本学は LSHTM との Joint PhD Degree Programme 創出に至る前提として、平成 27 年 4 月に LSHTM の強みである**疫学・統計学のモジュールをカリキュラムに組み込んだ大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科修士課程**を設置し、国際水準の修士レベルの教育を実践してきた。本プログラムでは、LSHTM の教材を織り交ぜた教育モジュールをさらに強化する。

LSHTM は、「英国の第三者評価機関である英国高等教育質保証機構の監査で高いスコアを獲得し、2008 年には RAE 調査に基づいたタイムズ紙の評価で優れた高等研究機関のトップ 3 に位置づけられている (詳細は (6) に記載)。本プログラムの修士及び博士教育にかかる教育の質は、グローバルヘルスの分野で日本をリードする本学と LSHTM の連携・協働により世界トップレベルを維持することができる。実際に、先行して本年 10 月からスタートする TMGH 研究科博士後期課程の Joint PhD プログラムは、「LSHTM と同等の学生選抜基準、教育研究能力、厳格な学位審査基準に基づいており、LSHTM が属するロンドン大学連合の教学委員会においてもその質が認証された。

75 年の長い伝統と歴史に基づいた感染症研究環境

本プログラムには、**熱帯医学に関する国内唯一の大学附置研究所「熱帯医学研究所」**を核として、大学全体として感染症研究を推進してきた **75 年の長い伝統と歴史に基づいた教育研究環境**という強い優位性がある。熱帯に志を有する多くの医師、研究者が長崎に集結し、アジアやアフリカのフィールドに赴き、現場に根ざした研究や人材育成に尽力し、途上国の人々からの大きな信頼を勝ち取ってきた。また、熱帯医学研究所は文部科学省の支援による二つ COE プログラムが 10 年にわたって継続されるとともに、**2005 年には WHO「熱帯・新興ウイルス感染症に関する」研究協力センターに指定**され、国際ネットワークが強化されるなど、日本を代表する感染症・熱帯医学研究拠点として認知されるに至っており、その研究力は本プログラム目標達成のための重要な基盤となる。

さらに、本学は 2005 年ケニアとベトナムに常駐型拠点を設置し、フィールド研究の規模を大きく拡大した。両拠点は文部科学省の支援により発展し、とりわけケニア拠点は、**日本人・ケニア人スタッフ約 100 名を要する、日本の国立大学最大のアフリカ拠点**となっている。その実績は、2016 年にケニアのナイロビで開催された第 6 回アフリカ開発会議 (TICAD 6) においても大きな反響を得た。また、ベトナム拠点は、長崎大学職員が 4 人常駐し、その他学内外の 52 名の研究者が参加して、ベトナム国立衛生疫学研究所の共同研究者 42 名と共に研究を推進している。とりわけ**中部ベトナムでは、住民 36 万人を対象とした世界トップクラスの疫学研究フィールド**を立ち上げ、小児肺炎ワクチンプロジェクトにビルゲイツ財団から **12 億円の研究資金を獲得**した。両海外拠点に駐在する教授が大学院生を指導できる学内規定を制定し、大学院生がより長期にわたり、熱帯病の流行地でフィールド研究を行うことが可能な体制を整えている。本プログラムにおいては、本学が持つこれらの海外研究拠点に加えて、LSHTM が持つガンビア及びウガンダにある海外教育研究フィールドへの学生の相互派遣や海外フィールドを活用し卓越した共同研究を促進していく。

また、人材育成の面においても、この強みは活かされている。2000年度に医歯薬学総合研究科**新興感染症病態制御学系専攻**（博士課程）を全国唯一の感染症に特化した博士課程として発足させた。2005年度特色ある大学院教育GPに採択されるなど、個性ある医学系博士課程として発展し、2012年の**博士課程教育リーディングプログラム「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」**の開設につながった。このプログラムは高い評価を受けており、本学が長年築いてきた蓄積が高レベルの感染症・熱帯医学教育を支えている。一方、グローバルヘルスの現場で高い実務力を発揮できる専門家を育成するため、医歯薬学総合研究科に2006年より国内外の医師を対象とした**熱帯医学修士課程**を、2008年には本邦初の国際保健に特化したMPH（公衆衛生学修士）を授与することのできる**国際健康開発研究科修士課程**を設置した。2015年には両修士課程を統合・拡大改組し本卓越プログラムの母体となる**熱帯医学・グローバルヘルス研究科**として現在に至っている。これまでに200名をこえる修士を輩出し、かれらは世界各地のグローバルヘルス最前線で活躍している。

さらに長崎大学は、アフリカ大陸におけるエボラやラッサなど最も危険度の高い、いわゆるバイオセーフティレベル4（BSL-4）に分類されるウイルスによる感染症の出現と繰り返される流行を背景に、研究と人材育成を目的とするBSL-4施設を建設すべく長年にわたりその可能性を検討してきたが、**2016年11月政府に設置された感染症対策関係閣僚会議において長崎大学キャンパスへのBSL-4施設設置を国策として推進することが決定され、施設設置計画が実現に向けて始動した。**地域住民の皆様のご理解の下、順調に進めば本プログラムが進行中の2020年の稼働が予定されている。

日本のグローバルヘルス中核拠点

本学には、本プログラムを展開するうえで他が比肩することができない以下に列記する卓越した国内ネットワークが整備されている。

● 国立国際医療研究センター（NCGM）との連携

我が国の国際保健政策の中心にある、国立国際医療研究センター（NCGM）と連携大学院協定を締結し、2017年4月、同センター内にNCGMサテライトキャンパスを設置した。遠隔授業システムを活用するとともに、本学の常駐教員に加えてNCGM所属の専任教員も研究指導に参画し、首都圏に数多く存在するグローバルヘルス教育を切望する社会人に大学院教育を提供する。既に昨秋から4名の社会人大学院生が充実した学びを開始している。東京キャンパスは今後、本プログラムに首都圏を中心に国内の真に卓越した人材を迎えるための門戸としての重要な機能を果たすことになる。2018年にはSDGs研究センターも設置され、国内外への情報発信機能もさらに強化された。

● 感染症共同研究拠点

上述のBSL-4施設は、グローバルヘルスの重要課題であるエボラウイルスなどBSL-4病原体を取り扱えるBSL-4施設は卓越した教育研究基盤であり、さらにはLSHTMのみならず国内外の主要機関との教育・研究ネットワークの中核に位置付けることができる。本学は、北海道大学、東北大学、東京大学、東京医科歯科大学、大阪大学、神戸大学、九州大学及び慶應義塾大学と、2014年1月に協定書を取り交わし、相互に連携・協力して、感染症研究コンソーシアムを結成した。このコンソーシアムは、BSL-4病原体研究のトップレベルの拠点形成及び感染症分野での世界をリードする人材の育成により、感染症に対する世界の安全・安心の向上に資することを目的としている。

● 民間企業やNPO/NGOとのネットワーク

エボラ出血熱など新興感染症の診断検査の開発（東芝、栄研化学）、マラリア対策に向けた新たな技術開発（住友化学、シスメックス）、日本が開発した認証技術をアジア・アフリカの健康増進へ応用（NEC）、顧みられない熱帯感染症に対する創薬（塩野義製薬、GHIT、DNDi）等、グローバルヘルスへ貢献をめざす民間企業やNPO/NGOとのネットワークを介した教育研究基盤も整備されている。NECからは「グローバルヘルスIT/IoT維新学講座」として寄附講座が設けられる予定である。

● 省庁間を越えた政府機関との連携

上述の厚生労働省の研究機関であるNCGMとの連携に加えて、長崎大学は、国際協力機構（JICA）から、国際経験豊富な実務者を教授として迎え入れ、共同で研究・教育活動を実施してきた。LSHTMとの連携は、第三国における日英科学技術協力の観点から両国大使館からも注目され、2016年には、両国の研究者と関係機関が一同に会して日英グローバルヘルス卓上会議をロンドンで開催した。

プログラムの特色、卓越性、優位性が分かるようにまとめたポンチ絵（1ページ以内）を別途添付してください。（文字数や行数を考慮する必要はありません。）

(3)プログラムの特色・卓越性・優位性 - 長崎大学 -

グローバルヘルス領域で世界最高峰に位置するロンドン大学衛生・熱帯医学大学院(LSHTM)と戦略的パートナーシップ






PARTNERSHIP

熱帯医学・グローバルヘルス研究科

200名を超える修士を輩出し、世界各地のグローバルヘルス最前線で活躍

博士前期課程
教育モジュール強化

LSHTMの教員と教材を基盤として構築した博士前期課程の2年間は、Joint PhDを完遂できるレベルの高度な知識と技術を学ぶ

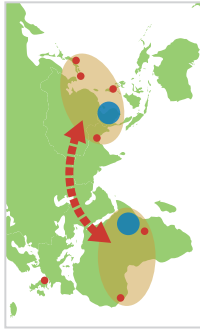
博士後期課程
LSHTMとの「Joint PhD」

LSHTMの学籍を取得し、多様な専門領域における傑出した専門家・実務者からハイレベルな指導を受け、両校で認められた学位を取得

5年一貫のカリキュラム



野口英世アフリカ賞受賞者であるPeter Piot学長及びBrian Greenwood教授を筆頭に、ロールモデルとなるべき世界トップレベルのLSHTM教員・研究者たちと共に、世界を動かす国際共同研究・教育・対策プロジェクト等に参画



本学の持つケニア・ベトナム・フィリピンの海外教育研究フィールドとLSHTMのガンビア・ウガンダ研究フィールドを繋いだ、アフリカ-東南アジア教育研究フィールドネットワークの構築

これまでの実績

LSHTMと連携した肺炎球菌ワクチン研究プロジェクトへビル&メリンダ、ゲイツ財団から総額12億円の研究費を獲得 など

世界を動かす
グローバルヘルス
人材育成プログラム

75年の歴史と伝統に基づいた感染症研究環境

日本のグローバルヘルス中核拠点

熱帯医学研究所

- 日本を代表する感染症・熱帯医学研究拠点 -

- 文部科学省の支援による2つのCOEプログラムが10年に渡り継続される
- WHO「熱帯・新興ウイルス感染症に関する」研究協力センターに指定



海外感染症研究拠点
- アジア・アフリカに展開 -



- ・ケニア拠点
多くの常駐スタッフを抱える国立大学最大規模のアフリカ拠点
- ・ベトナム拠点
世界トップレベルの疫学研究フィールドを確立

国立国際医療研究センターとの連携

- 日本の国際保健政策の中心にある NCGM専任教員も研究指導に参画
- サテライトキャンパスを設置し、首都圏の卓越した人材を迎える門戸としての機能を果たす
- OSDGs研究センターの設置



民間企業やNPO/NGOとのネットワーク

- sysmex
- TOSHIBA シオノギ製薬
- 栄研化学株式会社
- NEC
- GHIT Fund
- 任友化学

医歯薬学総合研究科
新興感染症病態制御学専攻

- 全国唯一の感染症に特化した博士課程
- 博士課程リーダーング・プログラム「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー養成プログラム」



高度安全実験(BSL-4)施設



グローバルヘルスの重要課題であるエボラウイルスなどBSL-4病原体を取り扱える卓越した教育・研究基盤(2020年稼働予定)

感染症共同研究拠点

世界に対する感染症の向上に資することを目的とした感染症研究コンソーシアムを結成



省庁間を越えた政府機関との連携

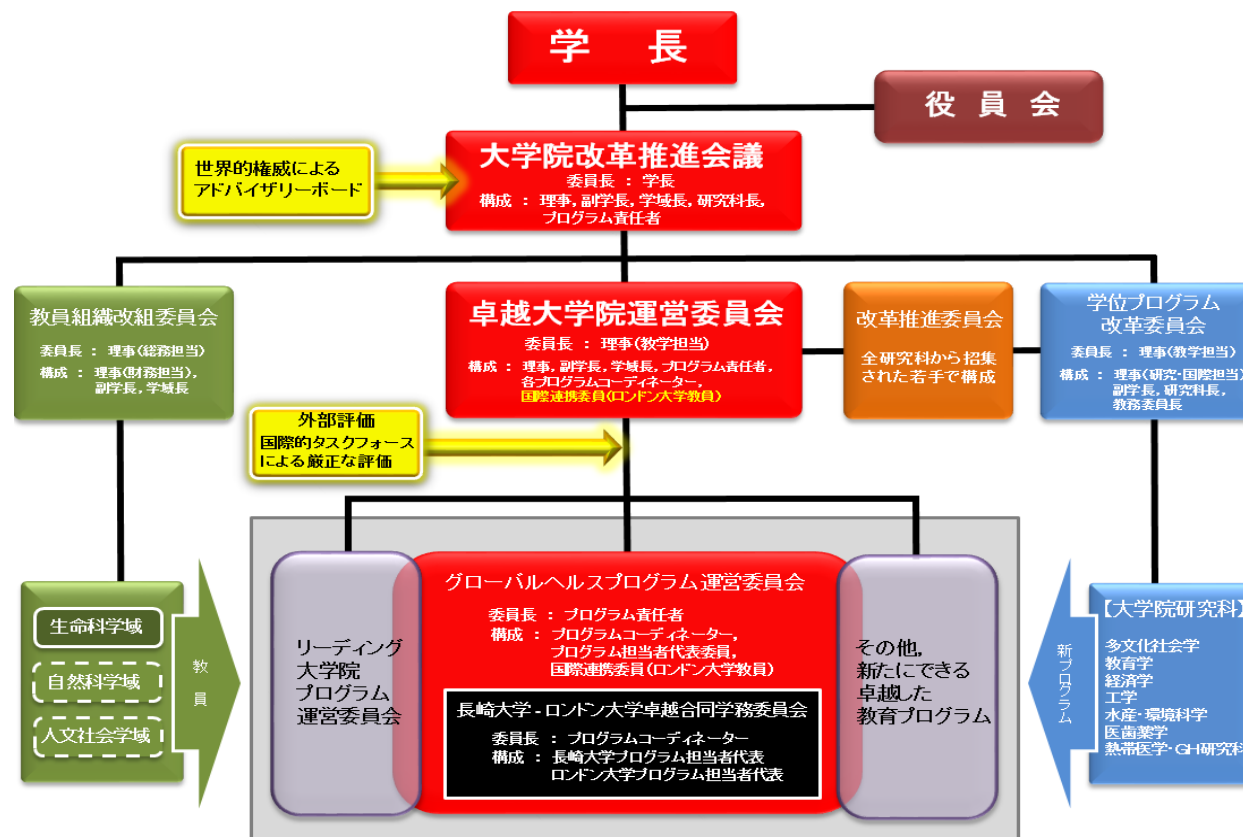
- jica
- 厚生労働省 (Ministry of Health, Labour and Welfare)
- 外務省

共同で研究・教育活動

(4) 学長を中心とした責任あるマネジメント体制【2ページ以内】

(学長を中心として構築される責任あるマネジメント体制を確保するための取組、大学全体の中長期的な改革構想の中での当該申請の戦略的な位置づけ、高度な「知のプロフェッショナル」を輩出する仕組みの継続性の担保と発展性の見込みについて記入してください。)

本プログラムの目標を達成し大学全体の大学院システム改革を実現するために、学長を中心に以下の組織体制を構築する。



● **大学院改革推進会議**: 学長を委員長として、大学院における教育・研究の高度化及び高機能化など、大学全体の大学院システム改革に関する意思決定と司令塔機能を担う。理事、副学長、学域長、関連研究科長等により構成する。本学が実施する様々な教育プログラムの目標達成のための予算・人事面での支援方策を本会議の最重要課題に位置付け、全学的な観点から戦略を策定し、各プログラムの継続性と発展性を担保していく。

● **卓越大学院運営委員会**: 大学院改革推進会議の下に、理事（教学担当）を委員長として、副学長、学域長、プログラム責任者、プログラムコーディネーター及びロンドン大学衛生・熱帯医学大学院（LSHTM）から派遣された国際連携委員で構成する標記委員会を置き、卓越大学院プログラム及びリーディング大学院プログラム等の運営戦略を策定する。そして、各プログラムに於ける教育・研究の環境整備を議論するとともに、プログラムの進捗状況をモニターし、適宜プログラムの見直しを行なう。さらには、学位プログラム改革委員会と協力し、新しい卓越大学院プログラムを立ち上げるなど、卓越した教育・研究の拡大を進める。

● **グローバルヘルスプログラム運営委員会**: プログラム責任者を委員長に、プログラムコーディネーター、プログラム担当教員、国際連携委員（LSHTM）で構成し、本プログラムの教学マネジメントを担う。さらに、本委員会の中に本学とLSHTMで組織する卓越同学務委員会を設置し、入学から学位取得までの全プロセスを管理することで、教育・研究・学位の質を担保する機能を果たす。

● **学位プログラム改革委員会**: 理事（教学担当）を委員長として、大学院改革推進会議での戦略に基づき、卓越大学院での成果を駆動力に、既存の大学院教育の抜本的改善方法を議論・策定する。さらには、卓越大学院運営会議と協力して、卓越大学院教育プログラムの拡大を進める。

● **教員組織改組委員会**: 理事（総務担当）を委員長として、社会の要請に沿った学位プログラムの高度化と尖鋭化を柔軟に行い、大学院を改革していくための前提となる教員の学域への大括り化を実現するために本委員会を組織する。

● **改革推進委員会**: 全研究科から学長が選抜した多彩な能力とアイデアを有する優秀な若手教員を結集させ本委員会を組織する。本委員会は、卓越大学院運営委員会及び学位プログラム改革委員会と連携し、卓越大学院プログラムの先進性を所属する研究科の教育に組み込み、新たな卓越した教育プログラムの構築に繋げ、10年後、20年後の長崎大学の将来を見据え、さらに世界や地域の現代的ニーズに対応した改革案の企画を担う。

● **アドバイザーボード**: Peter Piot 学長及び Brian Greenwood 教授といったノーベル賞クラス(両者とも LSHTM 教授でカナダのガードナー賞及び野口英世アフリカ賞受賞)の世界的権威やグローバル企業の経営者等を常任顧問とし、国際的視点から助言を受け大学院改革を促進させる。

● **外部評価タスクフォース**: 年に1回外部の関係機関の委員を入れた標記会議を開催し、運営状況、カリキュラム内容、学生の就学状況、研究内容や成果などを検討し改善策を審議する。構成委員として学長、プログラム責任者、関連産業界、WHO、UNICEF 等国际機関、国立国際医療研究センター、国立感染症研究所等国内研究機関、NGO の代表を予定している。

大学全体の改革構想における本プログラムの戦略的位置づけ:

本学の将来構想は、グローバルヘルス分野における世界的教育研究拠点となるとともに、地域の中核高等教育機関として地域に根差した特色ある教育・研究により地方創生を実現することである。グローバル化が進行し世界や地域のニーズが多様化、高度化する一方で、本邦の18歳人口が減少し高等教育全体の資源拡大が困難な状況において、将来構想を具現化する高度な「知のプロフェッショナル」を育成するためには、大学全体の大学院システムを改革し(1)従来の7研究科に閉じた縦割りの教員組織及び教育課程に横ぐしを入れるとともに(2)自前主義を排し大学の枠組みを超えた他の教育・研究機関との有機的な協働態勢を構築することにより、社会のニーズに適切かつ戦略的に対応した新しい学位プログラムを機動的に構築する必要がある。そのため、学長の強力なリーダーシップの下、従来は研究科・学部にも所属した教員を教育組織から分離し生命科学、理工学、人文社会科学の3学域への大括り化を断行し、学則を始め必要な規則等の改正を迅速に行い、大学院システム改革を実現する。

本卓越大学院プログラムは、世界的教育研究拠点の人材育成面における中心戦略に位置付けられるとともに、学内の既存研究科横断的な教員組織を構築する点、当該領域において世界のトップに位置するロンドン大学衛生・熱帯医学大学院 (LSHTM) との先進的なジョイント・ディグリー制度を採用する点で、本学の大学院システム改革のドライビング・フォース及びロールモデルとして極めて重要な位置付けにある。本卓越大学院プログラムを突破口に、引き続き地方創生を担う高度な知のプロフェッショナル育成に向けた海洋エネルギー関連大学院プログラムと人文社会科学系大学院プログラムの創出を予定している。

継続性の担保と発展性の見込み:

● 学長の下での大学院改革推進会議のリーダーシップにより、運営交付金機能強化経費や学長裁量経費等の学内予算や教職員ポストを優先的に配分するとともに、大型競争的資金の獲得を組織的に優先支援することにより継続性を担保する。また、国際的な基準に適應できるように、本プログラム遂行の組織基盤となる組織の設置や学則改正等を、臨機かつ迅速に行うとともに、国際連携研究戦略本部、広報戦略本部、産学官連携戦略本部、留学生教育支援センターなどの学長直轄の戦略組織機能を充実し本プログラムを重点支援する。さらに、全学共有スペースを活用して本プログラムに必要なスペースを優先確保することにより継続性を担保する。

● グローバル化が進展する中、新興・再興感染症をはじめとする疾病・健康不安が、途上国・先進国等を問わず地球規模課題となり、国際社会が協調して健康課題解決に取り組む「グローバルヘルス」の推進は、我が国に真の安全と安心、経済発展をもたらすと共に、国際社会における我が国のプレゼンスを高めることにもつながる。グローバルヘルスを推進できる突出した知のプロフェッショナルの育成のニーズは国内外を問わず高まっており、領域自体が大きな発展性を有する。その中で、本プログラムは(1)当該領域で世界をリードする LSHTM との連携を通してトップレベルの国際連携ネットワークの形成を展望できる点、(2) NCGM に設置した東京キャンパスで首都圏の志と能力の高い社会人学生にも門戸を開放する点、(3) 海外フィールド拠点や2年後に竣工予定の BSL-4 施設など教育・研究のインフラの飛躍的充実が期待できる点等から、今後の大きな発展を期待することができる。

ポンチ絵は不要です。

(5) 学位プログラムの継続、発展のための多様な学内外の資源の確保・活用方策【1 ページ以内】
(学位プログラムの継続、発展のための学内外の資源の確保・活用方策について記入してください。)

本プログラムは、初年度の設備備品等を除き、世界レベルの教員の雇用、招聘費用、学生への教育研究支援経費（海外研修費用含む）教材費等で年間約 2 億円の予算が継続的に必要となる。本学では、採択後 4 年経過時点で初年度の 50%、7 年経過時で 100%を学内外の資源を活用する計画であり、本プログラムの維持・発展のため、以下のとおり、学内外の資源を確保し活用していく。

優先的学内予算の確保

前述したプログラムの根幹をなす経費を、外部資金の獲得等の安定的とは言い難い資金によるのみ計画することはプログラムの質を低下させる大きな要因となる恐れがあるため、本学においては外部資金の獲得等を推進しつつ、不足分については、学内予算の中から学長裁量経費を拡大し、学長のリーダーシップのもと、本プログラムへの優先的配分による予算確保を行うこととする。

寄附金（長崎大学グローバルヘルス基金）の活用

学生への教育研究支援経費は、博士後期課程の学生を対象として月額 20 万円を支給することを想定している。ただし、全学生に当然に支給するのではなく、原則として日本学術振興会等の研究奨励金等の獲得努力をし、また卓越した人材を育成する観点から競争原理を組み込むことから、毎年 3～5 名程度（3 学年で最大 15 名程度）を対象とする。年間で最大 3 千 6 百万円程度が必要となるが、本プログラムでは、この教育研究支援経費は連携する企業や趣旨に賛同いただく個人からの寄附金を財源とすることとしている。既に本学では、グローバルヘルスを学び世界の健康課題への貢献をめざす学生への経済支援を目的に、2015 年に長崎大学グローバルヘルス基金を立ち上げており、これまでに 4 千 3 百万円の寄附実績がある。今後は、このグローバルヘルス基金の支援内容に“卓越大学院プログラム学生への就学支援”であることを明記したうえで寄附活動を展開し、企業との連携強化による、基金の拡大・充実を図り、本プログラムの学生を支援していく。

共同研究等の推進による外部資金の活用

講義は多くの外部講師を招聘して構築する観点から、本プログラムを継続、発展していくためには、教員の雇用及び招聘に係る経費が重要であり、年間約 1 億 1 千 8 百万円程度必要となる。また、学生の指導に必要な研究指導経費については、研究チーム毎に年間 2 百万円（最大で 4 千 8 百万円）を配分する予定としている。これらの経費については、LSHTM との連携によって強化された研究ネットワークと、設置が予定されている教育研究機関として国内唯一の BSL-4 施設を活用し、国内外の企業等との共同研究や受託研究等による外部資金を獲得し充当していくことを想定している。特に研究指導経費については、原則として将来的には教員が獲得する研究費から支出する。本学では、2015 年に LSHTM と連携しビル&メリンダ・ゲイツ財団から総額 12 億円の肺炎球菌ワクチン研究プロジェクトを獲得しており、今後も新たなプロジェクト（特に海外の大型研究資金）を獲得し続けるよう重点支援を行い、国際的な共同研究を推進していく。

学内教員の教育レベル向上とネットワーク構築による人材の活用

外部講師による講義を永続的に実施していただくだけではなく、本学の教員自身も実際に当該外部講師の講義を聴講し、7 年後までには同等レベルの講義を自身で実施できるまでにレベルアップすることを目指しており、そのために自前でプログラムを維持することが可能となる自律的なサイクル（教員評価を含めた）を構築する。また、本学は 2017 年 10 月に設置した東京の NCGM サテライトキャンパスを中心として、TMGH・SDGs 研究センターを立ち上げた。本センターの活動を軸に、官公庁、経済界及び NGO/NPO との首都圏での強固なネットワークを構築し、資金面のみならず優秀な実務家教員の人材を確保し、本プログラムの発展性を担保するものとする。

以上のとおり、本学においては、本プログラムの目的に沿った寄附金や外部資金の獲得等による学外資源を活用しつつ、学内予算を優先的に確保することにより、安定的な資源を確保する。

ポンチ絵は不要です。

(6) 個別記載事項その他、プログラム全体を通じての補足説明【4ページ以内】

(個別記載事項に該当する事項のうち、ここまでの説明では用いられておらず更に説明を要する点や、その他分野の特性等の説明を要する内容について、自由に記述してください。)

地球規模課題としてのグローバルヘルスに果たす日本の役割

今日における途上国を含む世界の保健医療対策の考え方は、従来の熱帯医学や国際医療支援から、グローバルヘルスの考え方へと大きく舵を切っている。感染症に関しては、AIDS やインフルエンザ等の地球規模大流行のリスクに加えて、2014-2015 年の西アフリカにおけるエボラ出血熱のアウトブレイクの教訓が示すごとく、アフリカの一隅で発生・流行する感染症が、多くの人間が国境を越え超高速で往来する現代社会においては、重要な地球規模課題の一つとなる。一方で、経済発展により生活様式が変容している途上国における疾病構造も大きく変化し、先進国と同様に生活習慣病が主要な死因として浮上しつつある。また、中国やインドで深刻化する大気汚染も重要な課題である。このような状況の変化に基づき、先進国・途上国の境界を越えて世界共通目線で世界の保健医療問題の解決をめざすのがグローバルヘルスの概念である。従来の感染症や国際保健といった特定分野以外の医学領域も糾合し、さらには社会科学等の学際的関与も含めた総合的なアプローチが必要なのである。

急速な人口の高齢化が進行するわが国においては、高齢者の生活と医療、介護が問題となり、「長寿リスク longevity risk」への対応が個人、家族、地域、国家レベルでも課題となっており、医療サービスの全国民への提供 (Universal Health Coverage, UHC) の持続可能性にも影がさしつつある。これらの国内問題は将来、世界中の国々が経験すると考えられ、その意味で我が国は人口の老齢化というグローバルヘルスの重要課題を先駆的に経験しつつあるといえることができる。

このような状況の中、1998 年の G8 サミット (デンバー) において、当時の橋本首相による地球規模の寄生虫病対策の提言 (橋本イニシアティブ) を皮切りに、2000 年の九州・沖縄サミット、2008 年の洞爺湖サミット、そして 2016 年の伊勢志摩サミットと日本が主宰した全てのサミットにおいて感染症を含む保健医療対策を最重要議題の一つに取り上げ、日本は一貫してグローバルヘルス分野において世界を主導する重要な役割をはたしてきた。また、2013 年には官民パートナーシップによる GHIT ファンド (グローバルヘルス技術振興基金) を創設し、当該分野の科学技術イノベーションを世界規模で推進している。グローバルヘルスは、国際貢献を通して我が国の経済発展にも大きな貢献を果たしうる科学技術領域といえる。

このような経緯に基づき国連が全世界が共通して取り組むべき課題として設定した 2000 年のミレニアム開発目標 (MDGs) 及び 2015 年の持続可能な開発目標 (SDGs) の目標達成のために我が国が取り組むべき柱の一つにグローバルヘルスが位置付けられるに至っている。

ところが、課題の重要性、ニーズの大きさの一方で、それを担うグローバルヘルス人材は世界規模でも不足しているのが現状である。特にグローバルヘルス分野における博士号取得者の割合は低く、当該領域における実務の推進、研究によるエビデンスの創出又はエビデンスに基づいた意思決定などができる組織のリーダーとなる卓越した人材の育成は急務である。2016 年日本政府は保健分野外交の一環として「平和と健康のための基本方針」を策定し、実施に際しての体制整備の一つに国内の国際保健人材の強化を掲げた。さらに、2017 年 2 月「国際的に脅威となる感染症対策関係閣僚会議」にて提示された「国際的に脅威となる感染症対策の強化に関する基本計画」の中で、国際感染症等対応人材の育成の必要性が強く謳われている。本卓越プログラムで養成するグローバルヘルス分野の「高度の知のプロフェッショナル」は地球規模課題の解決を通して世界の共通目標や我が国の外交・経済戦略の達成に大きな貢献を果たすことができる。

LSHTM の卓越性についての補足

LSHTM は、1899 年に設立されたロンドン中心部に位置する大学である。教員数 838 名を擁する大学で、約 120 カ国、1000 名以上の学生が、研究・学位取得のため在籍し、多数の国外教育・研究機関と共同プロジェクトを進めている。国連組織をエイズ制圧に向け協調させることに成功したエイズ合同計画 (UNAIDS) の初代事務局長を務めた Peter Piot 博士 (エボラ・ウイルスの発見者。2013 年第 2 回野口英世アフリカ賞受賞) が学長に就任して以来、それまでの臨床・微生物、疫学、公衆衛生の縦割りの 3 専門領域を横につなげ、学際的研究・実践活動を促進するための学内組織再編成を成し遂げ、グローバルヘルス時代の学術機関としてのロールモデル的存在となっている。

2014年の西アフリカでエボラ出血熱の大流行の際には、世界に先駆けて200名以上の大学職員を現地へ緊急派遣し、患者診療のみならず、エボラワクチン臨床治験を成功に導くなど、実地のフィールドで活動する学術集団として確固たる世界の名声を得た。これらエボラ出血熱対策等を代表とする世界規模の感染症対策における教育・研究が評価され、Times Higher Educationより“University of the Year 2016”を受賞した。2008年にはRAE調査に基づいたタイムズ紙の評価で優れた高等研究機関のトップ3に位置づけられた。

以上のように数多くのロールモデル的グローバルヘルス人材・研究者・教育者を輩出しており、本卓越大学院プログラムの戦略的パートナーシップを結ぶ相手としては、最も理想的な大学機関である。

準備状況（特ににLSHTMとの戦略的パートナーシップについて）

本学とLSHTMは2013年4月に学術交流協定を締結し、より一層の連携を開始した。その連携がまず形となったのが、2015年4月に日本で唯一、熱帯医学及び国際保健を基礎としてグローバルヘルスを体系的に学ぶことができ、LSHTMの強みである疫学・統計学の共通カリキュラムをモジュールとしてカリキュラムに組み込んだ長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科修士課程の設置である。この修士課程においては、LSHTMが世界公募により雇用した教授2名を本学に常駐させ、LSHTMとの連携を強化していくとともに、修士学生に世界トップレベルの研究を間近に経験させることで、学生自身のキャリア形成に卓越性と国際性を育ててきた。また学生のみならず、常駐するLSHTM教員が本学教員を対象に国際的な講義の実践方法や成績の評価方法、学位審査方法、授業評価のフィードバックなどをFD形式で教授し国際通用性を高めてきた。また、LSHTMで雇用された教員をサポートする本学の事務職員についてもLSHTMとのクロスアポイント職員としており、教員や学生の支援業務全ての国際化が加速した。さらに、本学をハブとし本学と連携大学院協定を締結する国立国際医療研究センター（NCGM）とLSHTMとの連携も強化されており、長崎、東京、英国の研究ネットワークにより合同のセミナーを毎年開催してきた。

この修士レベルの連携によりさらにパートナーシップは強化され、2017年12月に国際連携専攻設置にかかる協定を締結し、来る2018年10月からは、LSHTMと長崎大学の教員が共同して博士後期課程の学生指導を行うグローバルヘルス国際連携専攻を設置する。定員5名でJoint PhD Degree Programmeを先行的にスタートする。すでに学生選抜基準、教育・研究能力、厳格な学位審査基準などの教育の質がLSHTMが属するロンドン大学連合の教学委員会において認められた。この国際連携専攻では、学生がLSHTM及び本学の教員とで実施する国際共同プロジェクトに参画し、身近に世界トップレベルの教員から教育・研究を受けることが可能となっている。既に第1期生の選抜試験を実施し、世界7ヶ国から13名（志願倍率2.6倍）の優秀な学生から出願があり、LSHTMとの合同入試委員会において極めて優秀な6名の合格者を選抜した。

本卓越大学院プログラムは、この世界レベルの国際連携専攻を中核とした設計となっており、当該補助金を活用し、さらに高いレベルの教育・研究を展開していく。まず、疫学・統計学に加え、日本に専門家が少ない医療経済や保健政策等のモジュールを強化する等、修士レベルの教育をより充実させる。博士レベルについては本学が持つ海外研究拠点であるベトナム、フィリピン、ケニアの海外教育・研究フィールドと、LSHTMが持つガンビア及びウガンダにある海外教育・研究フィールドへの学生の相互派遣や海外フィールドを活用し卓越した共同研究を行う。既にLSHTMとの連携によりビル&メリンダ・ゲイツ財団から12億円の研究資金を獲得し、ベトナム拠点で進行中の肺炎球菌ワクチンの研究が実施されており、これをモデルにさらに多くの大型国際共同研究を展開していく。

また、以下に添付するように、LSHTMのPeter Piot学長からも本卓越大学院プログラムについて、これまでの本学のグローバルヘルス領域の教育・研究実績を基盤に、大学の将来構想とその実現のための学長の強いリーダーシップが、本プログラムの特長であるJoint PhD Degree Programmeによるパートナーシップを強化し、引いてはこのプログラムの成功が、我が国の世界的健康課題への貢献に



Latest News

Improving health worldwide

NOVEMBER 2016



School named University of the Year 2016

We're delighted to win University of the Year at the Times Higher Education Awards, in recognition of our response to the Ebola epidemic in West Africa in 2014/15.

[Read the full article](#)

繋がるものとしてサポートレターをいただいております、本学や日本のみならず、このプログラムが世界的にも必要性が高いことを証明している。

Keppel Street, London, WC1E 7HT
United Kingdom

Phone: +44 (0)20 7927 2278
Email: director@lshtm.ac.uk

LONDON
SCHOOL of
HYGIENE
& TROPICAL
MEDICINE



Professor Baron Peter Piot KCMG FRCP FMedSci
Director

4th June 2018

Application of Nagasaki University for the TAKUETSU PhD Programme.

To whom it may concern,

As the Director of London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM), I am writing this letter to support Nagasaki University's application for the TAKUETSU PhD Programme.

I confirm that our strategic partnership with Nagasaki University has a special meaning and is one of our strongest collaborations worldwide, with LSHTM Faculty actually based in Nagasaki. Many of our senior academic staff and I believe that Nagasaki University is not only the best partner in Japan but that is one of the best in the world.

Firstly, we have long been aware of the reputation and work of Nagasaki University, especially the Institute of Tropical Medicine (NEKKEN), in developing countries. We have met far more Japanese researchers in Nagasaki who understand the real world situation in low-income countries and who share the same goals as us.

Secondly, this university institutionally commits itself to global health, tropical medicine and infectious disease research. I respect the global vision and excellent leadership by the former president, Professor Shigeru Katamine, and the current president, Professor Shigeru Kohno.

Finally, I was very impressed by their competency and skills because Nagasaki University succeeded to be the first overseas university to establish the Joint PhD programme with our School – something that did not happen in over 100 years of LSHTM history. Whilst I initially proposed this idea, I recognise that this must have been a challenging task since there were no other preceding examples. I deeply believe that this innovative borderless way of conducting post-graduate education programmes will be the future model of nurturing genuine leaders in the field of global health. The students will have unique opportunities to be supervised in different countries and by different supervisors with various disciplines.

I believe that Japanese experts in both the public and private sector have tremendous potential that can be further applied for improving global health. I have no doubt that if Nagasaki University were granted the TAKUETSU PhD Programme that it would significantly accelerate not only our strategic partnership but also Japan's contribution towards global health.

Yours sincerely,

NCGM サテライトキャンパス SDGs 研究センターを起点とした首都圏ネットワーク

昨年 4 月に東京にある国立国際医療センター（NCGM）内に開設したサテライトキャンパスは、首都圏の社会人大学院生を受け入れ教育するとともに、NCGM を始め首都圏に存在する学術・医療機関や政府機関、民間企業、NGO 等の様々なステークホルダーとの新たなネットワークを形成するためのセンターとしての役割を果たしている。そのことを通して、本プログラムを含めた本学の教育・研究の質の向上、多様性の拡大を基盤にした、新たな展開を図る。このような首都圏ネットワークのキーワードとして SDGs を取り上げ、本年 4 月東京キャンパス内に SDGs 研究センターを設置した。SDGs は、2015 年 9 月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」における、持続可能な世界を実現するための 17 のゴール・169 のターゲットから構成される。グローバルヘルス領域は目標 3「すべての人に健康と福祉を」に分類されるが、グローバルヘルス課題には貧困、災害、食糧・水問題等の複雑な要因がかかわっており、課題解決には SDGs の他の目標との連携が非常に重要である。本センターでは、既に特別講座「よくわかる SDGs」を月 1 回のペースで開催し、それを通して政財界、官公庁、地方自治体、企業、アカデミアとの活発な交流が開始されている。

この取組みは、本プログラムの人材養成像に必要な「学術的知見を政策や社会活動に実装できる能力」の養成に大きく貢献するとともに、首都圏ネットワークを介して我が国のグローバルヘルス教育・研究に新たな展開をもたらし、科学技術イノベーションの推進につながるものと期待される。

本プログラムにおける総合大学としての協働態勢

長崎大学は 9 学部、7 研究科を擁する地方国立総合大学である。長崎県の中核大学として地方創生に貢献することに加えて、グローバルヘルス領域で世界的教育研究拠点となることを目標としている。グローバルヘルスをめぐる課題には、きわめて複雑な要因が関与しており、課題解決には学際的・分野横断的アプローチが不可欠である。したがって、本卓越プログラムの目標達成のためには総合大学としての叡智を糾合する協働態勢を構築していく必要がある。

これまでも熱帯医学・グローバルヘルス研究科 (TMGH) 修士課程における教育には、研究科の枠組みをこえて生命科学領域の感染症、疫学、遺伝学、リスク管理、社会科学領域の国際金融、開発経済、人類生態学等の専門家が兼任 (一部専任) 教員として関わってきた。研究面においても、アフリカのケニア拠点のロジスティクスに基づき、本学の水産学、工学の専門家が ODA 資金による「ビクトリア湖における包括的な生態系及び水環境開発研究プロジェクト」を 2014 年から 3 年間にわたり実施し、水産業振興と地元住民の健康増進 (感染症予防を含む) に貢献する大きな成果をあげた。

本卓越プログラムではこの協働態勢をさらに大きく展開し、TMGH 研究科の 5 年一貫教育を原則とするものの、入口における難関をクリアすることを条件に他研究科 (医歯薬学、工学、環境・水産学、多文化社会学) の学生にも門戸を開放する。そのことに伴い各研究科に所属する教員が博士前期課程におけるモジュール科目に参画するにとどまらず、博士後期課程における研究指導にも携わることができる。

さらに、学長のリーダーシップの下、各研究科・学部にも所属する全教員を教育組織から分離し生命科学、理工学、人文社会学の 3 学域に大括り化し、それを梃子にこの協働態勢を今後さらに拡大・充実していく。

プログラム担当者の特筆すべき背景と業績

本プログラムの特長はグローバルヘルスに関わる極めて多様な分野の研究者や実務家の参加である。中核となるのは TMGH 研究科であるが、学内において熱帯医学研究所、医歯薬学総合研究科、工学研究科、水産・環境科学総合研究科及び多文化社会学研究科など多くのメンバーが積極的に加わり、「グローバルヘルス」をキーワードとした全学的なうねりとなっている。中でも医療経済学や環境科学の課題に取り組む若手研究者のコミットメントは本学の将来を大いに期待できる点からも貴重である。また学外からも LSHTM や NCGM はもちろん、北海道大学人獣共通感染症リサーチセンターや帯広畜産大学原虫病研究センターなどから、グローバルヘルスを考える時に避けて通れない人獣共通感染症分野で国際的に高く評価されている研究者が参加している。さらに本プログラムでは産学連携の面を重視しているが、例えばグローバル企業としてトップを行く感染症の診断機器メーカーや製薬企業の専門家などが卓越した将来性のある大学院生の教育と研究指導に進んで協力を申し出ている。

また、本学のプログラム担当者は本卓越大学院プログラムの中でコアメンバーとして大学院生の研究を指導して行くが、皆それにふさわしい経験と実績を持つものであり、これは様式 4 の教育や研究活動の項を見れば一目瞭然である。以下にその一端を紹介する。

- 鈴木基,有吉紅也 : The Lancet Infectious Diseases 2017: 17(3): 313-321.斬新な手法を用いて 23 価肺炎球菌ワクチンによる肺炎球菌性肺炎の血清型別予防効果を始めて明らかにした。
- 森田公一 : The Lancet Infectious Diseases 2017: 17(8): 805-806.ベトナムで初めてのジカ熱患者および小頭症の症例を報告した。
- 西田教行 : Nature Medicine 2011: 17(2): 175-8.診断困難なクロイツフェルト・ヤコブ病などのプリオン病を高感度に検出する斬新な検査法 (RT-QuIC 法) を発明した。
- カレトン リチャード : N Engl J Med 2017: 376(10): 991-3.アルテミシニン薬剤耐性マラリアのモニタリングが、アフリカにおけるマラリア再流行の回避につながる可能性を示唆した。
- 北 潔 : Science 2016 : 352: 349-353. アトバコン耐性マラリア原虫は蚊の中では増殖できないことを示し、この耐性が流行地で拡散しないことを明確にした。

ポンチ絵は不要です。

(7) 大学院教育研究に係る既存プログラムとの違い【1 ページ以内】

＜プログラム担当者が、大学院教育研究にかかる既存のプログラムを継続実施中の場合のみ記載。それ以外の場合は該当なしと記載。＞

(現在国の教育・研究資金により継続実施中である大学院教育研究に係るプログラム(博士課程教育リーディングプログラム、その他研究支援プロジェクト等)に、当該申請のプログラム担当者が関わっている場合(プログラム責任者として複数プログラムに関与している場合を除く)には、当該プログラム及び関与しているプログラム担当者の氏名を明記の上、プログラムの内容、対象となる学生、経費の使用目的等、本プログラムとの違いを明確に説明してください。

特に博士課程教育リーディングプログラムについては、国の補助期間が終了している場合についても、継続されているプログラムとの違いを上記にならない記述してください。)

長崎大学では 2012 年度に博士課程教育リーディングプログラム「熱帯病・新興感染症制御グローバルリーダー育成プログラム」が採択され 2018 年度に終了する。このリーディングプログラムは「熱帯に蔓延する感染症および国際的に脅威となる新興感染症について幅広い知識と技術、およびグローバルな俯瞰力を備え、教育研究の推進と疾病制御の実践においてリーダーシップを発揮できる国際的人材を育成すること」を目的としており、本卓越大学院プログラムと類似した方向性の側面を持ち、その設置を考えるに至る基盤ともなったプログラムである。また、このリーディングプログラムは支援終了後も医歯薬学総合研究科博士課程の中で、現行の定員 15 名を維持したまま継続する予定である。大学の財源や日本学術振興会 DC 制度の活用、留学生については文部科学省の国費留学生制度、JICA のアフリカ感染症対策人材強化事業との連携による支援(年間上限 5 名)等により運営する。

本卓越大学院プログラムのプログラム担当者には、このリーディングプログラムを兼務する者(一覧表参照)が存在する。しかし両者のめざすところは明確に異なっており、おのずから教育・研究指導の内容は大きく違っている。リーディングプログラムは、医学分野を対象に熱帯病・新興感染症に特化したリーダーの育成を目的としているが、本卓越大学院プログラムはグローバルヘルスの推進に必要な、理工系、人文社会系を含めた多様なバックグラウンドを持つ特段に優秀な学生を対象とし、グローバルヘルスという統合課題領域において、地球規模で生じている健康課題を現場レベルで深く理解し、その解決に向けて技術や理論を構築できる教育・研究能力を有するとともに、学術的知見をグローバルな政策立案・実行等に結び付ける能力を兼ね備えた実践的・社会的リーダーの育成であり、その人材像はもちろん、カリキュラムや入試のレベル、またそのポリシーも異なっている。例えば、リーディングプログラムにおいては、英語コミュニケーションについては英語能力向上のための講義等を配置しているが、本卓越大学院プログラムでは、その入学選抜のレベルを LSHTM と同等 (IELTS7.0 相当) に設定しており、英語コミュニケーション能力等を養成する科目等ではなく、より専門性が高く問題の解決に貢献できる能力の養成をめざすなど、根本的にカリキュラム自体が異なっている。

なお、リーディングプログラムの学生が要件を満たした場合、本卓越大学院プログラムに移行することが可能となる仕組みを設定しているが、リーディングプログラムの学生が最短で本卓越大学院プログラムに移行可能となるのは、2019 年度からとなるため補助金による経費の重複は発生しない。

(リーディングプログラム及び本卓越大学院プログラムを担当する教員)

氏名	所属
森田 公一	熱帯医学研究所
西田 教行	医歯薬学総合研究科
金子 修	熱帯医学研究所
濱野 真二郎	熱帯医学研究所
平山 謙二	熱帯医学研究所
有吉 紅也	熱帯医学研究所
橋爪 真弘	熱帯医学研究所
安田 二郎	熱帯医学研究所
Culleton Richard Leighton	熱帯医学研究所

ポンチ絵は不要です。